

I 巻 頭 言

所長 小嶋 祥三

動物福祉と実験倫理は動物をあつかう研究にとって避けて通ることのできない問題である。研究所はかつてこの問題で大きく揺れたことがあった。研究所のサルの飼育や実験方法について、外国からきた研究者が内部告発をした。それ以後、研究所のサル類の飼育や実験にかかわる諸問題に対応するサル委員会を中心に、日本で最初の「指針」を整備するなど、さまざまな改善を行い、大変に好ましいことであるが、現在この問題についての認識は当時とは大きく異なっている。しかし、動物を実験に使用することは、さまざまな制約をかれらに課すことでもある、という現実には変わりはない。その制約は基本的には動物福祉と相容れない面をもつ。研究面を優先しすぎると、世界的な雑誌から掲載を拒否されるような実験になりかねない。福祉面を強調しすぎると実験そのものが成り立たなくなる。研究、実験と動物福祉の両者の必要性の間で綱引きとなり、ある点で妥協を成立させることになる。その点は一般社会の意識なども含むいろいろなファクターで移動する。

研究所のサル類は実験、研究用の動物である。展示用ではないし、まして愛玩用でもない。一般に実験をすることはさまざまなストレスを動物に与えることでもある。この不可避のストレスをできるだけ低減することが必要となる。それも学問的に価値の高いデータを安定して取りつつ、ストレスを低減させる実験手続きを見い出さねばならない。それは大変に難しい作業となる。ストレスを与える実験を行う研究者が自らそれを検討することが好ましい。しかし、一般に研究の目的はその点にないので、かれらにそれを期待するのは実際的には難しい。

霊長類研究所は前年度サル類保健飼育管理施設（サル施設）を改組し、人類進化モデル研究センターを発足させた。その中に生命倫理研究領域が設置され、スタッフも着任した。この研究領域に期待されているのは、動物福祉、実験倫理の研究、すなわち上記の難問に具体的な解決策を提示することである。私がサル施設長だったときに、施設にその役割を期待したが、当時のスタッフではとてもそこまで手が回らなかった。幸い専任のスタッフが着任し、これらの問題を対象にして、科学的に研究することが可能になった。研究の成果を大いに期待している。